

# なし幸水の予備枝利用によるえき花芽の着生

## 1 試験のねらい

なし幸水の予備枝を利用する際の予備枝の取り扱いとえき花芽着生との関係を昭和56～57年の2か年検討した。

## 2 試験方法

農試ほ場の幸水(56年度15年生)を供試して、昭和56年は予備枝の太さ別に切り返し程度を強(1.5cm残して切り返し)と弱(1/2の長さで切り返し)の2区とし、次の点について検討した。1) 予備枝の太さ及び切り返しの程度とえき花芽着生との関係。2) 予備枝発生部位の枝の太さとえき花芽着生との関係。3) 予備枝の方向とえき花芽着生との関係。57年は、せん定時に予備枝を1/2に切り返し約45°に誘引して、1) 予備枝の太さとえき花芽着生との関係、2) 予備枝発生部位の枝の太さとえき花芽着生との関係について検討した。

なお、昭和56年は、5～6月の気温が低く天候が不順であったため、生育が遅れ新しうの停止も遅い年であった。57年は、5～6月の天候は良好で、生育が良く新しうの停止が早い年であった。

## 3 試験結果及び考察

1) 表-1に予備枝の太さ及び切り返し程度とえき花芽着生との関係を示した。昭和56年をみると、発生した新しうのえき花芽率は、予備枝の太さが7.9mm以下の細い枝では切り返し程度が強く8.7%、弱で14.0%あり、30%以上のえき花芽率を長果枝として利用できる基準とすると、いずれの区も低い値を示した。太さ8.0～9.9mmの枝では、切り返し程度が強くえき花芽率が15.6%、弱で32.8%あり、太さ10.0

mm以上の枝では強く4.0%、弱で48.7%あることから、予備枝は、8mm以上の太さで1/2に弱く切り返すことが良い。57年は、56年と同様に予備枝が太い方がえき花芽率が高い傾向であるが、予備枝の太さによる差は56年と比べてはるかに少なく、5～6月の気象条件が良好な年は、細い予備枝であってもえき花芽着生が良いことを示した。

2) 表-2に、太さ8mm以上の予備枝を1/2に切り返した場合の予備枝の発生部位の太さとえき花芽着生との関係を示した。昭和56年をみると、長果枝

表-1 予備枝の太さ及び切り返し程度とえき花芽着生との関係

| 年次    | 予備枝の太さ mm | 切り返し程度 | 供試予備枝数本 | 発生した新しうの長さ cm | えき花芽率 % |
|-------|-----------|--------|---------|---------------|---------|
| 昭和56年 | 7.9以下     | 強      | 45      | 89            | 8.7     |
|       |           | 弱      | 43      | 77            | 14.0    |
|       | 8.0～9.9   | 強      | 34      | 119           | 15.6    |
|       |           | 弱      | 27      | 110           | 32.8    |
|       | 10.0以上    | 強      | 14      | 140           | 4.0     |
|       |           | 弱      | 19      | 126           | 48.7    |
| 57年   | 7.9以下     | 弱      | 121     | 84            | 44.0    |
|       | 8.0～9.9   | 弱      | 126     | 102           | 48.5    |
|       | 10.0以上    | 弱      | 93      | 109           | 53.2    |

表-2 予備枝発生部位の太さと  
えき花芽着生との関係

| 年次        | 発生部位<br>の太さ $cm$ | 供試予<br>備枝数本 | 花芽率30%以上の<br>新しょうが発生した<br>予備枝数本 | 比率% |
|-----------|------------------|-------------|---------------------------------|-----|
| 昭和<br>56年 | 3.0以下            | 24          | 17                              | 71  |
|           | 3.1~4.0          | 19          | 8                               | 42  |
|           | 4.1以上            | 23          | 9                               | 39  |
| 57年       | 3.0以下            | 69          | 59                              | 86  |
|           | 3.1~4.0          | 62          | 50                              | 81  |
|           | 4.1以上            | 85          | 61                              | 72  |

予備枝は太さ8mm以上で1/2に切  
り返したものについて。

表-3 予備枝の方向とえき花芽着生  
との関係(56年)

| 予備枝<br>の方向 | 供試予<br>備枝数 | 予備枝の<br>1年後の<br>太さ $mm$ | 発生し<br>た新し<br>よう長 $cm$ | 花芽率30%以上の<br>新しょうが発生した<br>予備枝数本 | 比率% |
|------------|------------|-------------------------|------------------------|---------------------------------|-----|
| 上 向        | 24本        | 17.3                    | 136                    | 14                              | 58  |
| 斜上向        | 34         | 13.8                    | 102                    | 6                               | 18  |
| 横 向        | 19         | 10.3                    | 68                     | 0                               | 0   |

として使えるえき花芽率30%以上の新しょうが発生した予備枝の割合は、予備枝発生部位の太さが3.0cm以下で71%, 3.1~4.0cmで42%, 4.1cm以上では39%であり、予備枝は細い枝から発生したのを使うことが良い。57年は、56年と同様に発生部位の太さの細い方がえき花芽の着生は良いが、発生部位の太さによる差は56年よりもはるかに少なく、発生部位の太さが太くてもえき花芽着生の良いことを示した。

3) 表-3に予備枝の方向とえき花芽着生との関係を示した。予備枝の方向は、横向きよりも上向きのものを使うことにより、えき花芽率30%以上の新しょうが発生した予備枝の割合が高かった。また、横向きよりも上向きの方が、予備枝の1年後の太さが太く、発生した新しょうの長さも長かった。

以上のことから、幸水の予備枝は、3.0cm以下の細い枝から発生した8~12mm程度の太めの枝をせん定時に1/2程度に切り返すことが良いと考えられる。予備枝の方向は、上向きの方がえき花芽の着生は良いが、予備枝が太くなり新しょうも長くなりやすいので、棚付けがしにくくなる。このため、予備枝の方向は、斜め上に誘引することが良いと考えられる。

#### 4 成果の要約

幸水を供試し、予備枝として利用する際の枝の取扱い方とえき花芽着生との関係を検討した。その結果、えき花芽の着生を良くするために、予備枝は、太さ3.0cm以下の細い枝から発生した8~12mm程度の太めの枝をせん定時に1/2程度に切り返して、斜め上向きに誘引することが良い。

(担当者 金子友昭 田中敏夫)